
カンピオーネ～幼女魔王の冒険～

メア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カンピオーネ〜幼女魔王の冒険〜

【Nコード】

N3100S

【作者名】

メア

【あらすじ】

この話しはカンピオーネの二次創作です。

ご都合主義が多分に入ります。

なぜなら、神は普通倒せないから！

そして、これは八人目の神殺し……………幼女魔王の話である。

ドイツ郊外。

少女は目の前の光景が信じられなかった。

生まれてから6年間育った街は瓦礫の山となっていた。

見渡すとたくさんの死体が目に入った。

自分を守り死んだ両親が目の前にいた。

「いやあああああ！！！！！！！！！！」

絶叫をあげ現実を否定しようとするがかなわず、しだいに落ち着きを取り戻した。

そして、目の前で戦い合っているまつろわぬ神二柱に復讐を決意するのだった。

再開＋ナイトウィザードを追加します。

プロローグ（前書き）

ネギまがメインなので更新はゆっくりです。

プロローグ

少女は目の前の光景が信じられなかった。

生まれてから6年間育った街は瓦礫の山となっていた。

見渡すとたくさんの死体が目に入った。

そして、自分の横に横たわっていたのは両親の死体だった。

「いやあああああああ！！！」

そして、少女は元凶に復讐をちかった。

そう、目の前で殺し合いをしているまつろわぬ神の二人に。

少女は立ち上がり周りを見渡した。

「あれを使えばいいんだ。」

少女が手にしたのは神が使っていた神の槍だった。

槍は少女の生まれもった強大な呪力を吸い上げ重量が格段に下がり威力が上がってゆく。

そして、少女はお互い必殺の一撃を近距離で撃ち合い拮抗しているまっつろわぬ神の背後から自信の生命力も吸わせた槍で二人の神を撃ち貫いた。

「なんてことをしてくれた！」

「死ぬ。みんなのかたきです……………」

そして、極限まで拮抗していた力は外部からの刺激により暴発した。

お互い傷つき満身創痍だった二柱の神に成す統べもなく、少女とも
に消滅した。

ドイツにある一つの街が地図から消えた。

後に残ったのは大きなクレーターだった。

幼女魔王リーゼロッテ・モルディオの誕生

「おのれ、小娘め我とフレイヤの戦いを邪魔をするとは！」

「我等が動けぬうちに背後からの見事な一撃でした。あのタイミングで神槍でなければやられませんでした。」

朦朧とした意識の中で聞き取れる会話が あった。

激痛が五体を苛み、頭と全身がとてもなく痛い。

「ふん、貴様がグングニルなど借りて来るからだ。」

「貴方に勝つためです仕方ないでしょう。」

あれだけダメージ受けたのにまだ死んでないなんて変。

「小娘も蘇るんだ、その時かりを返してやる。」

「エピメテウスとパンドラの忌まわしき姉妹が残した呪法ですね。愚者と魔女の落し子を生む暗黒の聖誕祭、神を贄として初めて成功するさんだつ（でなかった）の秘技ですね。我等の神力が彼女の心身に流れこんでいます。」

「我の時の神としての力もか。」

「ええ、こんなケース初めてだけど二人同時に倒してるからね。」

「もう、新たな落し子の誕生に気付いたか。」

「パンドラが直々に来ましたか。」

「あら、ご挨拶ね。あたしは神と人のいるところには、必ず顕現する者。あらゆる災厄とひとつかみの希望を与える魔女ですもの。驚くほどのことじゃないでしょう？……この子があたしの新しい娘ね。ふふ、苦しい？でも我慢しなさい、その痛みはあなたを最強の高みへと導く代償よ。甘んじて受けるといいわ！」

甘く可憐な声が耳朵を打ち、やさしく頭を撫でられた。

誰だろう、この声の人は？お母さんだろうか？

「さあ皆様、祝福と憎悪をこの子に与えて頂戴！八人目の神殺し

護堂よりもさらに若き魔王となる運命を得た子に、聖なる言霊を捧げてちょうだい！」

「ぬかせ、貴様の新たな落し子などすぐ葬ってくれる！」

「では、私フレイヤが祝福を与えます。貴女は私達の名放な愛の女神と時の神の権能をさんだつする最初の神殺しです。何人よりも強く賢くなりなさい。再び我々と戦う日まで、負けぬ身でありなさい！」

「史上初めて二人の神を殺したあたしの落し子よ。楽しみにしているわ。」

こうして、八人目のカンピオーネは生まれたのだった。

幼女魔王リーゼロッテ・モルディオの誕生（後書き）

ふう、神様へんかもしれないけど気にしないでね。

ちなみに、パンドラ達は不意打ちでも人間の状態で神を殺したなら認めてくれると思います。

それに、二人同時ですからね。

カンピオーネ（前書き）

名前を変更しました。そして、原作お読みの方は、今回読む必要がありません。なぜなら、カンピオーネ第一巻目にあるカンピオーネの説明だからです。

カンピオーネ

【一九世紀イタリアの魔術師、アルベルト・リガノの書籍『魔王』より抜粋】

……この恐るべき偉業を成し遂げた彼らに、私は『カンピオーネ』の称号を与えたい。

読者諸賢の中には、この呼称を大仰なものだと眉をひそめる方がいるかもしれない。あるいは、私の記録を誇張したものともみなす方もいるかもしれない。

だが、重ねて強調させていただく。

カンピオーネは覇者である。

天上の神々を殺戮し、神を神たらしめる至高の力を奪い取るが故に。

カンピオーネは王者である。

神よりさんだつした権能を振りかざし、地上の何人からも支配され得ないが故に。

カンピオーネは魔王である。

地上に生きる全ての人類が、彼らに抗うほどの力を所持できないが故に！

【二〇世紀初頭、枢機卿アントニオ・テベスが教皇庁に宛てた書簡より抜粋】

神に背を向け、悪魔の知識を弄ぶ魔術師どもに『王』と崇められる存在がごいます。

おそらく、皆様も彼奴らの称号を一度は耳にしたことがありでしょう。

カンピオーネ。エピメティウスの落し子。魔王。

極めて遺憾ながら、この者達に抗う術を我ら人類は持ちません。

彼奴らと互角に戦い得るのは、同等のカンピオーネか父なる神に使える天使たち、または忌まわしき異教の神々だけなのです……………。

カンピオーネ（後書き）

変わりなく外見は星空○メモリアに出て来る可愛い死神メアちゃんです。

記憶と言葉を無くして（前書き）

どんな魔術があるかわからないし、
適当に自由にすると！

記憶と言葉を無くして

ん…………私が目を開けると見知らぬ天井が目に入った。

「……………（ここはどこ？）」

声がでない……………それに私っ！

思いだそうとすると激痛が走った。

なっ、名前は……………リーゼロッテ……………名字は……………
っ……………思いだせない。

……………年齢は……………六歳……………ぐっ……………だめ
……………わからない……………思いだせない……………うう

……どうしたら……ひつく……いいの……だれかたす
けて……。

ドアが開き、おばあさんが入ってきた。

「おや、気付いんだねよかったよ。水をお飲み……」

おばあさんが水の入ったコップを差し出してくれた。

「……………（こく）」

「けふおっ、けふおっ！」

喉が乾いていたので、水を生きよいよく飲んだため蒸せた。

「ほら、大丈夫かい？ ゆっくりお飲み。」

「……………（こく）」

「……………あ……………う……………（ありがとう）」

「無理に喋らなくていいよ。ほら、お休み。お粥作っておくからね。」

お粥ってなやんだろ……………ねみゆい……………。

「さあ、お休み。」

「……………（こく）」

そして、私は眠った。

嫌……………嫌……………見たくない。

「逃げるんだ!」

「リゼットこつちよ！」

少女を連れて逃げる二人。

見たことのある顔……………でも、思い出せない……………思い
たそうとすると激しい頭痛がするだけで……………ちっとも思いだ
せない。

そして、二人が少女をかばい槍の一撃をくらい死んだ。

それから、少女は辺りを見回し絶叫した。

「「いやあああああああ！……！！！」」

私と少女が悲鳴を上げた。

そして、目覚めた。

「大丈夫かい？」

隣でおばあさんが心配そうに声をかけてきた。

「……………は……………（はい）」

慌てて頷く。声は全然でない。

「そうかね、これを飲んでお休み。」

魔法瓶から温かそうな飲み物を貰いゆっくり飲んでゆく。

蜂蜜とミルクが混ざり合いとても美味しい。

「それじゃ、私は隣の部屋にいるから、なにかあったらお呼び。」

おばあさんは立ち上がり、部屋から出ようとする……………いや……………
……………ひとりは……………いや……………

「どうしたんだい？」

無意識におばあさんの服の裾を掴んでいた。

「……………あ……………う……………」

「一緒にいてほしいのかい？」

「……………（じく）」

「分かったよ。なら、一緒に寝ようかね。」

「……………（じく）」

おばあさんに抱きしめられながらゆっくりと寝ることができた。

次朝、身体は動くようになった。

おばあさんに言われてお粥を食べた。初めて食べたけど、美味しい。身体のコから温まって来る。

食後、おばあさんと会話をしている。

「まだ、話せないのかい？」

「……………（じく）」

相変わらず、言葉でない。

「そうかい。じゃあ、ちょっと待っていで。」

おばあさんは奥の部屋にいった。

「？」

なにを持ってきたくれるんだろ。

ゆっくり蜂蜜ミルクを飲み待っていると、長細い箱とスケッチブックみたいなを持ってきた。

「字は分かるかい？」

「……………ち……………ゆ……………し……………（少し）」

「分かるみたいだね。」

おばあさんから、スケッチブックと長細い箱を受けとった。

「こっちはスケッチブックで、これはクレヨンだよ。孫の持ち物だけど、こいつらもだれかに使ってもらうほうが幸せだろうから、遠慮せずに使っておくれ。」

「……………（こく）」

受けとったスケッチブックにさっそく文字を書いてみる。

「“ありがとう”」

「気に入って貰えてよかったよ。」

拙い字だったけど、伝わってよかった。

「私は、ツアオバラーよ。ツアオでもおばあちゃんでも好きお呼び。」

「ツアオバラ……魔法使い……？」

「ああ、名前は捨てたからね。今は、ここで一人暮らしさ。しばらくここに居るといいよ。」

「ありがとう。おばあちゃん。」

それから、数週間たった。

私は、相変わらず喋れない。

おばあちゃんの家にある本を読み本の内容を覚えていった。

「ここまで覚えたのかい。」

おばあちゃんが飽きれていた。なんでだろ？

「よく、理解できるね。基礎しか教えてないのに。」

おばあちゃんに魔術の基礎を教えて貰うと、魔術書の内容がすらすらと理解でき、同時に使える確信が芽生えた。

「 かんたん……………わかる。」

「 世の魔術師が聞いたら泣くレベルね。」

「 もっと……………読んでいい？」

「 ああ、家にあるのは好きに使いな。後は、夜一人で寝るのとお風呂も入れるようになるいいんだけどね。リゼット？」

「 “無理”」

内容は覚えてないけど必ずといっていいほど悪夢を見るし、お風呂は……………目が痛いし。

一年がたった。

「 まったく出鱈目じゃな。一年で魔術を極めてしまうか。」

「家にある本は全部覚えた。」

家にあつたのは、ルーン、セイズ呪術、魔術。

「次は錬金術を研究する」

「そうか、頑張りな。」

「うん。」

それから、三年……………10歳の誕生日に運命は動いた。

記憶と言葉を無くして（後書き）

次は戦いです。

そして、どんどん強くなるリゼロッテ。

愛称は二つ リゼットとリゼです。

クロノス（両方）とフレイヤの権能募集！

倒して欲しい神に壊して欲しい街や歴史的建造物も募集しますよ！

じゃんじゃんどろぞー！

リーゼロッテの覚醒（前書き）

イレブンアイズが混ざってる。

そして、リア友に戦う神なにかいいか聞いたらとんでもないのが来たので、頑張って書いてます。

明日……………今日、続き頑張る。めっちゃ途中でメール容量超えました。

リーゼロッテの覚醒

【リーゼロッテは神殺しである】

おばあちゃんと暮らして四年の月日が経ちました。

私は、錬金術の頂きに届いた。

そう、完全物質である呪法増幅機賢者の石がと偶然の産物で虚無の石ができた。

おばあちゃんが取っていたオリハルコンと変な石を混ぜたらできたの。

「しかし、賢者の石まで作りだすなんてね。貴女の目は凄いから気をつけるのよ?」

「……………（じく）」

私の右目には「叡智の魔眼」が魔術を習いだすと現れた。

叡智の魔眼は、あらゆる魔術、魔法や物質を解析し理解できる。

魔眼のおかげで、こんなに早く覚えられた。使いすぎると一定期間失明することを身を持って体験した。

「後、私に何かあつたらこの手紙を持って、日本にいる草薙一郎って男に届けておくれ」

「“分かった”」

おばあちゃんの体調はどんどん悪くなっていく。

寿命……………また一人になるの?エリクシールを作ろうとしたけど……………止められた。それに、意味がないらしい……………

……うう。

「そんな顔するんじゃないよ。この頃、私はたのしいんだから。死んだ孫とは別に新しい孫ができたんだからね。」

ぐす……………頭を撫でてもらうと安心する。

「私の技術も継承してくれたからね。」

「闇の魔法？」

「そうだよ。まさか、私が投げ出した魔法まで完成させるとはね。この希代の魔術師といわれた私だというのにね。」

アレクスターやエリファスって名乗ってたらしい。

「目があるから、楽だった」

「そうか、リゼットに伝えなくてはならないことが……………
……おや、お客のようだ……………リゼット今すぐ裏手から買い物へ行ってくれないかい？」

おばあちゃんの身体が若返っていく。それと同時に私の身体が軽くなった。

「……………」
「く」

得に気にせずに裏口から街に向かった。

アレイスター Side

いったか、済まないリゼット。

さて、これで見逃してくれるといいのだがね。

私の肉体は二十代後半に戻っている。

外に出てお客様と対峙する。

目の前には、つば広い帽子を目深にかぶり、青いマントの老人がいた。

「ご用件をお伺いしたいまつろわぬ神よ。」

「決まっておろう。わしの愛人を殺したユピメテウスの落し子を始末するためよ。」

やはり狙いはリゼットか。

愛人……………そして、この格好……………

「神よ無礼を承知でお願い申し上げます。お見逃しいただきたくお願い申し上げます。」

「断る。」

神槍かまずいな。

「では、御手向かいいたします。」

「神に挑むとは愚か者めが、身の程をわきまえよ！」

さすがですね。勝てる気がしません。しかし、時間は稼がせていただく。

「契約のもと、アレイスター・クロウリーが願い奉る。顕現せよ魔術と冥府の神へカテーよ！」

空中に黒い神力の塊が出現する。

「ほう。」

「固定、掌握！ぐっ！」

冥府神の力を身体に取り入れ、神降ろしを行う。

「冥府神の力が、借り物の力でわしをどうにかできると思っているのか！」

「思っていないせん。ただ、譲れない物があるだけです。」

人生最後の戦いを大切な者のために開始した。

「来たれ冥府の雷！」

黒い雷を放ちながら、戦場を動き回る。

「無駄だ。」

やはり、雷では無理か。

「くっ！」

向こうも雷撃を放ってきたが威力が段違いだ。拳銃と弾道ミサイルくらい違うな。大地に手をつき神力を流しどうにか避ける。

「避けたか。では、こいつでどうだ？」

奴の影から狼が二匹現れた。

「くそ。」

襲い来る狼をよけ、大地に神力を流し込む。

「我が矢は矢にあらず、死の力を宿すものなり！」

弓を作り、矢を放つ。

「！」

狼を貫き、大地に縫い付ける。

「ちっ、殺すこともできるのか！」

奴の炎の魔術を避けたところ右腕に噛み付かれた。

「ふん、ただではくれてやらん！舞え、炎獄！」

右腕もろとも狼を燃やし尽くす。

片腕を抑え出血を抑える。都合がいい。

「やるではないか！」

神槍を構え突っ込んでくる。

「させるか！風よ我が意に従い顕現せよ！サイクロン！、風よ我が身をつつめ！」

嵐を呼び奴の妨害を行う。さらに風を纏い距離を稼ぐ。

これで……………っ！

「がつ!!」

サイクロンを突き破り、一本の槍が飛来し左足を貫いた。

「くそ!」

左足がちぎれたか!

「どうやら、ここまでじゃな。死して我が配下に入るがよい。」

ここまでなのか?

「そして、貴様の手で憎き神殺しを殺してくれるわ!」

ふざけるな! 誰がそんなことさせるものか! 大切な者をまたこの手にかけるなど許せるか!

「ほう、まだ抗うか!」

「ぐはー!!」

蹴られ、家の壁に激突し、壁が崩れた。

ここまでか！

「おばあちゃん!!」

リゼットの声が聞こえる………………。。

おばあちゃんに言われた通り、裏口から山を下る。

お客様って誰だろ？嫌な感じがするけど……………。

っ！

なに今の音……………。家のほうから轟音が聞こえてきた。

なにかあったの？

狼の遠吠え……………戻らなきゃ！

家に入ったら、壁が崩れて若い姿のおばあちゃんが飛ばされてきた。

「おばあちゃんー!」

「……………逃げろ……………奴は……………お前を……………」

「嫌!」

なんで、おばあちゃんが!

「……………だ……………し……………! (だめ、死なないで!)」

どんどん血がながれてゆく。

「……………なっ……………ひっく……………うう……………」
「……………な……………ひとりに……………しないで……………」
「……………」

「なく……………な……………それ……………より……………伝える……………」
「……………ことが……………ある……………」

「なに？」

スケッチブックの既を書いてあるページをひらく。

「リゼ、ット　お前　は　カンピ
……オーネ、だ　お前が　殺し　た神の復
習らし　だから逃げ　ろ　いき　ろ
……」

それだけ、いっておばあちゃんは目を閉じた。

やだ………私のせい？

私が神を殺したから………。

ふらふらと外に出ると、つば広の帽子を目深に被つり青いマントを身につけ、灰色の髭を蓄えた片目の老人がいた。襲い来るプレッシャーは半端ない。

「お初にお目にかかる。若きユピメテウスの落し子よ。我が名はオーディン。貴殿に殺された愛人フレイヤの敵を取りに来た。」

なにを言っているの？私が殺したなんて……………。

「“そんなの、私知らない！”」

そんなことでおばあちゃんを殺したの！

「ふむ、記憶がないのかね？」

「……………（こく）」

「ふむ、なら戻してやるかの！」

っ！目の前に行きなり現れ首を絞められる。

「……………あ……………っ……………」

苦しい……………息ができ……………ない……………

「んっ！」

指を口の中いれられなにかの魔術をかけられる。

「さあ、思いだすのじゃ！」

その言葉と同時に頭の中に今までの悪夢の内容やいろいろなことが流れ込んでくる。

[illegible]

「ふはは、おもいだしたか！」

オーディンは私を放り投げた。

「貴様のせいで我が計画が狂った。ゆえに貴様をフレイヤ復活のための贄にしてくれる。」

「はあ、はあ。があつ！」

蹴られ殴られ続ける…………お母
さんもお父さんも、おばあちゃんも友達もみな死んだ…………
…………生きてる意味あるのかな？

「ふん、あの愚か者も愚かな無駄死にだったな。」

「ぐ……………かはあ！」

踏み付けられ、蹴られる。

「このような者のために、命を落とすとはな！」

おばあちゃん……………。

「つつ！」

槍で刺され死を意識する。

本当にいいの？このまま死んでも

貴女は誰？

私は貴女、6年間生きた私

私はあいつ

らを許せない

私から全てを奪った神を許すことはでき

ない

貴女はどう？おばあちゃんを奪ったあいつを許せる

？

許せない。

おばあちゃんが最後に願ったことは？

生きろって……………。

なら、行きましょう。私達の前に立ち塞がる者をことごとく排除しましょう

うん、私達から大切な者を奪った奴らに復讐する。そして、おばあちゃんが願った通り生きる！

ええ！

私達はここから生まれる

さあ、行きましょう。私達は覇道の道を進むのみ！！！！！！！！

私の前に、自分と同じ姿……………今の私よりほんのすこし小さい姿の少女が現れ手をさすだしてくる。

私はその手を躊躇なく握り返す。

「なんじゃ、いきなり神力が上がったじゃと?」

二人のリーゼロッテが混ざり合う。

「「我は冥府魔道を進む者なり!」」

初めて自分の声を発する。

「「我が覇道の前に立ち塞がる者をことごとく打ち砕く者なり!」」
「」

宣誓を行っていくと身体の奥から力が沸いて来る。

「「人であろうと、神であろうと、魔王であろうとがありとあらゆる生きとし生きるものに死を与えん!……!」」

二人のリーゼロッテが完全に混ざり合った。

「なんじゃこの馬鹿見たいな神力と呪力は！」

完全に混ざり合うと同時に爆発的に神力が増大した。

「成った。」

頭の中がすっきりしている。

「覚醒したか。遊び過ぎたか。しかし、これもよい！さい、戦うぞ
ユピメテウスの落し子よ！！！！！」

「私は破壊し殺し殺戮するだけ。」

「やれる物なら、やってみるんじゃない！」

「言われるまでも無い。」

そして、手を付きだし攻撃を行う。

「契約に従い、我に従え、四元の女王、我が前に立ち塞がる者に死を与えよ、虚無の滅び。」

四元素を全て合成し、目標地点で対消滅を起こさせる。

「これは、まずいの！スレイプニルよ！」

はずした。

オーデインはスレイプニルに乗りグングニルを構え高速で突っ込んできた。

「我が槍は避けられぬぞ！」

グングニルがやかい。地面に手をつけ土の壁を多数鍊成し、防壁にする。

「無駄じゃ！」

「！」

多重障壁を展開。同時に、氷の槍を多数打ち出す。

「無駄無駄！」

「くっ、痛い。」

クングニルによって吹き飛ばされた。

その後も応戦するが、クングニルの絶対命中は強力だ。

「どうした口だけか！」

暴風となり襲ってくる。

「ブラストフレア！」

オーディンの隙をつき吹き飛ばすが黄金の鎧に阻まれダメージが無い。

すかさずオーディンはクングニルを投擲してくる。勝利の笑みを浮

かべている。

死の恐怖と憎悪が増大する。そして、一つの権能が使用可能になった。

「停滞空間。」

使用したのはクロノスの権能〔時の支配者〕。時間をとめ、叡知の魔眼を過剰に使用し止まっているグングニルを分析する。

グングニルを手に取り全力で神槍を支配し、大量の賢者の石と虚無の石を使い分解、再構築を行う。こうして、クングニルは鎌に生まれ変わり私の物となった。

リーゼロッテの覚醒（後書き）

やっちまった。リゼットが冥府魔道に……………まいつか。私が好きな言葉は善悪相殺。

感想あるがとうございました。

なぜなに幼女魔王様は〜じま〜るよ〜（おい

今回は、リーゼロッテの権能について〜です。

実は時の支配者以外にも使われてます。そう、叡智の魔眼です。時の支配者は、その名の通り時間を操れます。その中でも三つの区別がある。

一つ目は今回使われた停滞空間。これは一時的に時を止めることができる。制限時間は一日で約10分から30分の間止められる。止めてる間に生物攻撃しても意味はない。

この空間、内で動ける生命は本人のみ。

物とかなら触れて許可をだしたら元にもどる。今回はグングニルを元にもどし、神力を思いつ切り使って支配を奪い取りました。

ここからは、代償を説明するね。

停滞空間の代償は止めた時間の10倍肉体の成長が止まる。

名前は考えてないけど、未来に進ませる方は歳をとる。過去は身体の年齢が下がるです。レートは過去未来はもうちょと厳しくしよう

かなとも考え中です。

覚醒条件、使用条件は恐怖と憎悪です。クロノスは怖くて息子たちを食べたから。憎悪は親を殺したから(?)、もしくは子供を憎んでたんじゃないかな? 一時は。

次はフレイヤより叡智の魔眼。

これも権能だよ。リーゼロッテは理解してなくても使ってたけど。

智の女神と呪術の女神としてだね。
才能はあつたし、女神の権能でも上がった。そして、駄目押しが魔眼ですね。解析、細かく調べられる。

覚醒条件は魔術などを習う。

代償、使用制限。

長時間の連続使用や解析難易度で変わるが基本的に、目から血が出るまではまだまし、痛いだけ。

負荷が超えると一定期間右目が失明し不規則に痛みが襲う。

最初は約三ヶ月失明した。草薙の復活と同じくどんどん下がってく予定です。

ドイツで魔術結社だすならゲーテ？

まあ、リーゼロッテ的に日本にむかって歩くだけ！

では、このへんで。また会いましょう。

なぜなに幼女魔王様終了。

主神オーディンとの死闘

そして、できた鎌は全身が紅く、刃身の真ん中に漆黒で色々なルーンが刻み込まれている。

「なんだ、なにがどうなったのじゃ！」

「クングニルを掌握して作り替えた……………」

驚いているオーディン。

「いく……………ブラストフレア！」

隙を逃さず魔術……………魔法の域に届いた術を行使する。先程とは威力が違う。この鎌自体が賢者の石でできているし、ルーンも刻まれているのだから、増幅効果は圧倒的。

「ぐはあ！」

今度はダメージが入った。追撃をかける。

「神々のいましめを解き放たれし、深淵よりも黒き虚無の刃よ、我が力、我が身となりて、共に滅びを与えよ、神々の魂すらも打ち碎かん！」

言霊を使い鎌……………

ディザスター殲滅者の虚無の力を解放する。

「アクセルブースト加速増幅。」

即席で身体加速魔法を創り、吹き飛ばされたオーディンと相馬スレイプニルに接近した。

「死んで……………」

スレイプニルの頭を刈り取り、遠心力を利用した切り返してオーディンの首を狙う。

「っ！ユル！」

防御のルーンか……………。

「エオー！」

不可視の障壁を切り裂き消滅させた時には、既にオーデインはエオーを使いランダムに移動したみたい。見渡すと離れた位置にいた。

「仕留め損ねた。」

「おのれ！来たれ、ヴァルキュリア戦乙女！」

背中に羽根のある美しい女性が数人現れた。

「ありがとう……………わざわざ教えてくれて。」

「なんじゃと！」

「私は……………フレイヤの権能を持つ。そして、ヴァルキュリアフレイヤも戦乙女を統轄している。つまり……………来たれ、ヴァルキュリア戦乙女！」

こちららも戦乙女の権能を使い召喚する。

「くっ！」

「「行け！……！」」

同時に指示を出した。戦乙女同士の激闘が始まった。

お互い、指揮しつつ魔術を撃ち合う。

「テイル！」

戦いのルーン……………なら……………。

「多重発動、術式拡大・狂戦士、再生の炎！」

狂戦士により身体能力が格段に上昇し、傷を恐れなくなる。ほぼテイルと変わらない。再生の炎は傷を持続的に治してゆく。

「ソーン！」

オーデインがさらにルーンを使い氷の巨人を召喚された。

急ぎ近づき、殲滅者で切るための準備をする。

「刀身を再構築……………巨刀。」

巨大な刀身に再構築し直し巨人を一刀両断する。

「っ！」

巨人を殺したところに炎槍と氷槍がとんできた。

「ディヴァイン・バスター！」

魔砲で炎槍と氷槍を破壊し、閃光で視界が白く染まるなか、停滞空間を使い、オーディンに接近し解除と同時に切り付ける。

「対策はしてある！」

鴉が割り込んできた。

「残念。」

「次はこちらからじゃ！」

その後、何度も切り結んだ。

だんだん、押されてきた。悔しいけど、さすが北欧神話の最高神っていうところ地力が違う。

なにかないかな？ 打開策を見つけないきゃ負ける。止めの一撃はあるけど当たらない。

まったく、逃げると言ったのにな。

覚醒すればもはや、平穏な生活とは無縁なのにな。

「しか、し……………さすが……………」

孫娘のために最後の一手をくれてやるか。

激痛を堪え、這って進む。

「いま……………だ……………」

リゼットとオーディンが離れた。

「はっ……………どう……………オー……………ディン……………きゅ……………
ま……………の……………まけだ……………」

貴様が敗北する理由は私とリゼットをあなどったことだ。

さあ、冥府の鎖タルタロスよ。我が命も吸い付くし奴を戒めよ……！！

後は、まかせたぞ……………我が愛しき子よ。

クロウリー Side Out

これは、おばあちゃん？

私は、おばあちゃんの呪力を感じた。

「なんだこれは！」

大地に六芒星の魔法陣が現れ、中から漆黒の鎖が出現し、オーディンを握め捕る。

「いまがちゃんす……………」

「く、外れぬ！あの人間の仕業か！」

「おばあちゃんがくれたんだ。ここで仕留める……………我は神を殺し、神の力を篡奪するものなり！」

身体は既に限界を超えているが執念で動かす。

「く、碎けよ！」

タルタロスの鎖がどんどん壊されていくけど……………私の刃はオーディンに届いた。

「まだじゃー！」

「ううん、これで終わりだよ。神を砕く者！」

オーディンに突き刺さった刃から虚無が溢れ出しオーディンの内部から破壊してゆく。

「**がああああああ！！！！！！**」

神殺しの虚無の刃の言霊と神を砕く者による内部からの解放攻撃。
真正正銘、全力全開。神力、呪力共に全てを虚無の破壊に注ぎ込む
即席で創り出した最強の切り札。

「覚えておれ！！！！我は貴様を必ず殺してやるわ！！！！」

その言葉を最後に残し消滅した。

それと同時にオーデインの神力が流れ込んでくる。

「勝った……おばあちゃんは」

傷だらけの身体を引きずりおばあちゃんの元へいくとそこには……
 ……おばあちゃんの服とおばあちゃんが大切にしていた……
 ……神力を醸し出している黒い十字架のペンダントがあった。

「おばあちゃん……………ありがとう……………私は生きるよ……………」

これだけは、持っていこう。ペンダントを首にかけてお墓を作り、相談してあった通り家を燃やす。悪用されそうな危険な魔術書などがたくさんあるから……………認識疎外と人払いの結界を張り……………」

「うう……………おばあちゃん……………」

涙が止まらなくなり一晩中泣きつづけた。

次の日、右目を押さえながら街へと向かった。

主神オーディンとの死闘（後書き）

ふう、終わった。

先生「オーディン強すぎルーンまじ反則」。

補足説明

最後のタルタロスの鎖は、対象の力を一時的に封印できます。

あと、準備してる間にタルタロスの鎖を回収したリーゼロッテである。

送り返してないからちぎられた部分は残りそれを合成して自分の物にしたリゼット。

現在の装備

主兵装：ディザスター殲滅者これは、体内に収納。

補助武装：タルタロスの鎖。これは、左手にある。伸縮自在。

アクセサリー：神器のペンダント（十字架）。なんの神かは分かっていない。

です。

では、次回。感想待ってます。

新たな出会い

地形が変わった山を、まだ身体中に傷が残っている状態で一生懸命下山していく。

うう、痛い……………あう、頭打った……………ぐず。

左目だけだから、距離感がわからない……………戦闘中はカンピオーネの力で大丈夫だったんだけど……………。

あう、こけた……………。

そして、身体中に傷を作りつつなんとか街に辿り着いた。

「??.?」

ネチュカワの町につきました……………おかしいの……………
違う街にいくはずなのに……………なんでだろう?

うにゅ……………ねむいの……………

「おい、大丈夫か?」

倒れてゆく身体を誰かが支えてくれたねが分かった。

「おい、しっかりしろ!」

誰かの声を聞きながら意識が途切れた。

【一年前に賢人議会に提出された報告書より】

ドイツで起きた消滅事件について、この事件は調査の結果まつろわぬ神フレイヤとクロノスが戦っていたことが原因だと思われる。それと同時に新たな魔王が生まれたという噂も出て来た。

【賢人議会に提出された新たな報告書より】

北欧の最高神オーディンがまつろわぬ神としてド

イツに顕現したとの神託がくだされた。一年前に消滅したフレイヤとクロノスとの関連性も疑われる。そして、次の日にはオーディンが何者かに殺されたみたいです。結果を見つけ中に入ると、地形が変わった山を見つけた。これは明らかに神と何者かが争った形跡がみつかった。しかし、神殺しや別の神もこの地に現れていないことからドイツに八人めの神殺しが現れた可能性がある。

.....ん、ここはどこ？

「お、きづいたか？」

「.....あ.....（ここは？）」

っ！また.....言葉がでないよ.....

「おい、どうした？」

「……………あ……………う……………」

頑張ってジェスチャーで伝える。

「言葉が出ないのか。」

「……………（じく）」

「そうか、どうするか。」

十代後半ぐらいの少年が困っていると、奥から少年と同じぐらいの少女がやってきた。

「きづいたみたい？」

「ああ、それが喋れない見たいなんだ。どうするか？」

「なら、紙と鉛筆。」

紙と鉛筆を受けとりお礼をする。

「
“ ありがとうございます。”
」

「俺はシンだ。こっちはステラ。」

「よろしく。」

黒髪の男の人がシンで金髪の少女がステラ………覚えた。

「
“ リーゼロツテ。リゼットでもリーゼ好きに呼んで下さい。”
」

「分かった。」

「うん。」

それから、しばらくして不思議な事実に気付いた。

「
“ 消失事件は四年前じゃなくて一年前？”
」

「うん、そうだよ。」

そういえば、おばあちゃんがここの結界は特別だっていったから、
そのせいかな？

「
“ありがとう”」

「
気になくていいさ。」

それから、話を聞くとどうやらネチュカワの町で二人ぐらしして
いるらしい。

「
リーゼは何処にいかうとしてた？」

「
“日本に行こうとしてた。”」

おばあちゃんから受け取った手紙を届けないといけないし。

「
日本……………お金が結構な額必要だがあるのか？」

「
“ない”」

手元には、Euro^{ユーロ}が少しあるだけ。

「でも、飛んでいけばいい」

「飛んで？」

ステラの疑問はもつともだよな。

「魔術で飛んでいくの」

「君も魔術使えるんだな。」

「貴方達も使えるんだね」

「うん／ああ」

「でも、無茶……………」

「そうかな？」

「うん（なでなで）」

ふわぁ、気持ちいいです。

「日本までの距離を考えると無理だな。」

残念です。戦乙女に持って貰って飛ばうとおもったんですけど。
ヴァルキユリア

「それと俺達は、東北聖堂騎士団には追われている。」

東北聖堂騎士団はたしか、性魔術結社でしたね。

「ステラが狙われてるんだ。」

「なぜ？」

「神を召喚するための生贄にするんだと。ふざけやがって。」

「だから、シンが連れ出してくれた。」

「なるほど、わかりました。」

助けいただいた恩もありますし排除しましょう。

「危ないから、傷が治ったら出て行ったほうがいい。」

「だな。」

「わかりました。しばらくお世話になります。」

しばらく、シンとステラのお世話になることにした。

新たな出会い（後書き）

シンとステラ……………ええ、種運命ですよ。ステラが好き
です。シンは殺すかどうか悩む中（あ

新たな神？

ステラお姉ちゃんやシンお兄ちゃんと一緒に生活しだして一週間がたったです。

「おい、二人共できたぞ」

「「はい」（うん）」

ステラお姉ちゃんは声を出して、私はスケッチブックで返事をするのです。

「はい、持って行って」

「・・・ん・・・」

二人で、シンお兄ちゃんが作った卵とクリームチーズソースを絡ませたパスタを二人でテーブルに運ぶのです。

「“美味しそうなです”」

「うん」

湯気を出している美味しそうなパスタ。具材は厚切り生ベーコンに

マッシュルーム、玉葱・・・・・・・・あらびきコショウもいいアクセントになっているです。

「・・・・・・・・美味しい・・・・・・・・」

「はい、とても美味しいです。いつもありがとうございます」

皆さんお分かりかも知れませんが、リーゼとステラお姉ちゃんはいっさいの生活能力が無いのです。はい、シンお兄ちゃんにたよりつきりです。あと、リーゼは一応料理は出来るのです。材料を鍋に入れて呪力を込めながらネルネルするだけの簡単なお仕事なのです。

「どういたしまして。それより、リーゼはどうするんだ？怪我はもういいんだろ？」

「はいです。この一週間の間に完治したのです」

右目はまだ使えませんが、身体や呪力は回復したのです。

「そうか。なら、もう行くのか？」

「はいです」

「心配」

「大丈夫なのです」

前から予定していた事です。

「それに、早く手紙を届けないといけないのです」

「そつか……………」

晩ご飯を食べた後、部屋に金塊を10個くらい作り出してから、深夜にこっそりと抜け出したのです。

そして、移動したのはこの街の出入口である橋なのです。リーゼは鎌を持って、この橋で仁王立ちなのです。

「止まれ！」

しばらくすると、白い鎧の一団がやって来たのです。

「小娘、何用だ。我等の邪魔だてをするなら許さんぞ」

「それは、こちらのセリフなのです。二人の邪魔はさせないのです」

「あの二人の知り合いか……………ならば、貴様も生贄にしてやるう！！行けっ！！」

「……………おう！！」「……………」

迫って来る人達を放置して、スケッチブックを仕舞うのです。

切り掛かってきた騎士さん達に、ディザスター殲滅者を一閃……………それだ

けで、三日月のような鎌に騎士さん達の下半身は消滅したのです。

「なっ、何だと!?!」

「馬鹿な!?!」

「逃げないでくださいです。橋が壊れちゃうので……………だめです」

鎌の柄で、地面を叩き地面に五芒星を展開……………騎士さん達の足元にも五芒星が展開されたのです。

「……………な、なんだ!」

「エクスキューション」

触れるだけで対象を殺す呪力を込められた闇を作り出す魔法なので、しかも、苦痛とその人にとって最悪が再現される魔法なので、苦しみながら死んで行くのです。

「呆気ないですよ?」

「ひっ……………」

「貴方達の本拠地を教えるのです」

「わ、わかった!だから、命だけは……………」

「……………(く)」

騎士さんを約束通り、生かしたまま賢者の石にかえてから、騎士さんに教わった場所に、騎士の賢者の石を使ってメテオスフォームを撃ち込んでやったのです。

これで二人は安心なのですよ。

アリスSide

「今、街が一つ消滅しました。私、アリス・ルイズ・オブ・ナヴ
アールが霊視いたしました」

「それは、いかなる神又はカンピオーネですか？」

「行使されたのは魔法域に達した魔術ですね。場所はドイツでした」

「まさか！」

おそらくは、一週間前に報告された八人目の神殺しでしょう。

「あそこには魔術結社がありましたね」

「確か、神を召喚しようとしていたはずですよ」

「では、神を召喚できたのか？」

「いえ。生贄に逃げられたと報告が上がっています」

「馬鹿だな」

「ええ」

確かに、愚かにも魔王たるカンピオーネに眼をつけられるようなことをしたのですから、彼等の死は自業自得で問題はありません。問題は民間人に被害が出ていることですな。

「ドイツに至急諜報員を送り込んでくだ．．．．．っ！」

「どうしました？」

景色が移り変わる。これは託宣かしら。

「街を生贄に召喚された空を飛ぶものをあまねく支配下におく蠅の女王、新たな神殺し．．．．．」

「プリンセス・アリス．．．．．まさか．．．．．」

「どうやら、最後の悪あがきで神を召喚したようですね」

「．．．．．」

「なんて事だ．．．．．それに、召喚された神は．．．．．」
ええ。おそらく、ビックネームでしょうね。

アリス Side Out

新たな神？（後書き）

召喚されたのはあの方です。

「なんでわたしなのよっ！？ しかも、召喚された瞬間隕石による爆撃ってなんなのよ！？　ねえ、死にたいの？死にたいのよね！！」
（CV：ゴトウサ様）

という感じです。

異界の神との闘い 1

神Side

全く、最悪な気分だわ。リオンとアゼルと一緒にお茶してたのよ？あのネガティブ魔王のアゼルの機嫌がどうなってることやらー！

「さあ、神よ！」

「我等の願いを」

「ふふふ………」

人間ごときにここまで虚仮にされるなんて久しぶりよ？それに、勝手に神殿みたいな所に召喚した上に、願いを叶えて貰えると思っ
っているのかしら？

「我等の敵を倒し、我等をお助けくだ……ぎゃああ……！！！！」

「な、何をつ！」

「うっさいっ！いいから、死になさい！」

プラーナ（存在の力）を吸い取……。効率悪いわね。それに
姿が蠅人間……。あれ？色々おかしいわよ？

「って、これ本体じゃない!!!!!!」

何がどうなってるの？ここはファージアスじゃないの？いえ、有り得ない。世界結界が存在していないみたいだし。

「別世界？でも、私の本体が顕現する程のプラーナが無くなれば、この辺り一帯は消滅しているはずよね？」

とりあえず、姿はいつものにしましょう。

それに、プラーナを吸収出来ないわね。さつきは血を吸い取ったみたいなのよね。

「別世界と云うより、異世界ね。まあ、どうせなら楽しまなきゃ損よね？ふふふ」

.....

「気のせいよね？　なんか変な音がするんですけど……ちよつと、なんなのよ！」

隕石が雨のように降って来るんですけど？

「術者は・・・あそこね・・・遠距離転送の爆撃・・・・・・・・いいわ、その喧嘩、かってやるわ!!!!!!」

まずは邪魔な石つころを排除しないといけないわね。

「ヴァニティワールド」

人のいないこの街と、街の上空にある魔法陣ごと別世界（異界や空間）を創りだし、纏めて握り潰す。

「綺麗になつたわね」

後に残ったのは綺麗な更地だけよ。この私がやったんだから当然ね。ふふふ、さあ、楽しい狩りの時間よ。

神SideOut

あれ、魔術が強制解除されたです。とりあえず、移動するのですよ。何か、危険な気がします。

転移術式・・・・・・・・起動です。肉体をアストラル体に変更して、幽世・隠世に移動。幽世・隠世から常世・常夜に移動・・・・・・・・

「見付けたわよ！」え？いきなり攻撃が来たです！

「なんなんですか！」

スケッチブックを取り出して、ページをめくって、ブンブンとスケッチブックを振り回すのです。
ここは幽世・隠世の森ですね。

「えっと・・・なんなんですかと聞かれたら、答えてあげるのが世の情け、愛とじゅ・・・って、何よこれっ！後ろにRの文字とか、だいたい二人いるでしょうがっ！？」

「????」

電波を受信したのです？とりあえず、小首を傾げておくのです。

「電波少女さんです？」

きゅっ、きゅとスケッチブックに新しい文字を書いて見せるのです。

「違うわよっ！？　まあ、いいわ。それより、貴女もなんだかんだいって、この私を前にして余裕ねよ？」

「頗る体調がいいのです」

「・・・・・・」

「それで、どちら様ですか？　神のようですが、リーゼと闘うでいいです？」

リーゼと同じ銀の髪をショートカットにして、悪戯好きそうな金の瞳、整った容姿が人形のように綺麗なのです。服装はコスプレ制服（？）な格好です。

「神と云えば神よね。古代神だけど……そして、闘うかどうかだけど……殺るわよ!!」

「っ!？」　「リーゼは遠慮したいのです!」

両手でスケッチブックを掲げて、左右に振るのです。

「いや、可愛いけど却下よ」

「むゝ仕方ないのです。神殺しの魔王たるリーゼは、神とは殺るか殺られるかなのです」

「は？神殺しの魔王ですって？」

戦争開始なのです！

スケッチブックにかかれた六芒星の魔法陣に呪力を注ぎ込み、発動させるのです。

「ちよっ」

発動させたのはヴォルケーノという魔術ではない魔法。それは、六芒星からはい出てきて、紅蓮の炎で出来た深紅の猫。

『行くのです』

「にゃー、にゃー」

「くっ！　ちょ、何よその威力！」

猫の引つかきが、大地に裂け目を作り出したのです。しかも、その裂け目から炎蛇が多数出現し、暴れてるです。森も火の海なのです。

「ちっ、邪魔よスターライト」

多数の光の奔流が炎蛇を消し飛ばして、自身はヴォルケーノを捕まえたのです。

「フシャー！？」

「熱いわね。でも、それだけよ」

腕を燃やされながら、ぐちゃっと握り潰されたのです。本当に強い神なのですよ。

「ふふふ、驚いた。本体である私に、腕一本とはいえ、焼き尽くすなんてね。んっ・・・・・・・・よし」

腕をちぎったと思ったら、瞬時に再生したのです・・・・・・・・どんな生命力してるのですか？というか、数千度の塊を握り潰すなんて非常識なのです。

「いや、そんなのをスケッチブックに書いた魔法陣から呼び出すあなたも充分、非常識よ」

「・・・・・・・・」

「否定できないのです。そもそも、私達カンピオーネは非常識の塊だったのです」

しかし、これは真面目にやらないといけないのです。

「まさか人間の闇夜の魔法使い（ナイト・ウィザード）がここまでやるなんて……この世界は化け物だらけなのかしら？ 私達古代神に匹敵する力……あれ、これは神力？なら、この娘は転生者なのかしら？

まあ、どっちにしろ殺すだけよね。感謝なさい。このベール＝ゼフアーが本気をだして貴女を殺してあげる」

「全力でお断りなのです」

これはこちらも全力全快でいかないと話にならないのです。

「なら、こちらも正真正銘、全力全壊なのです。だから、少々お待ち頂くのです」

「はっ、敵が待ってくれると思ってるのかしら？あまりにおめ……ん？」

「負けるのが恐いのです？勝つ自信があるなら、待つのがラスボスの威厳というか、格下相手に待たないのは神として恥ずかしく無いのかとリーゼは思っています」

「くっ……わかったわよ！待てばいいんでしょ待てば！！！！待ってあげるからはやくなさい！そのかわり、弱かった赦さないわよ！！！！」

激甘なのです。でも、顔を真っ赤にして頬を膨らませるこの神様は可愛いのです。

「早くなさい」

「はいです」

深呼吸して、右目の包帯を外して、完全無欠な最強のカンピオーネのイメージを想像し、自身を作り替える言霊を詠唱するです。

「我は冥府魔道を進む者なり！」

自分の声で目標を発する。

「我が覇道の前に立ち塞がる者をことごとく打ち砕く者なり！」
「宣誓を行っていくと身体が作り替えられ、身体の奥底から力が沸いて来る。」

「人であろうと、神であろうと、魔王であろうと、我が覇道ならば、ありとあらゆる生きとし生きるものに死を与えん！！！！！」

「・・・・・・・・出鱈目なくらい跳ね上がったわね・・・・・・・・」

「我が道は冥府魔道、修羅の道・・・・・・・・ですっ！」

右手にスケッチブック、左手に三日月の鎌ディザスター殲滅者を持って、神代の闘いを再現する。

「いいわよ・・・・・・・・やってやろうじゃない！！！！！」

動いたのは同時、リーゼは重力に重力を重ね合わせ作り出したブラ

ツクホールを賢者の石と虚無の石で、強化して圧縮した闇の球体をスケッチブックのページを多数使って、前方に作り出したのです。神は金色の色の球体……神聖な太陽のような物を左手に作り出して行くのです。

この工程を一秒にも満たない間に、お互いが作り上げたのです。

「デイヴァインコロナっ!!」「ブラックホール・フェアリーズ!!」

リーゼはスケッチブックから闇の球体を放ち、神は光の球体を左手から放ったのです。光と闇の球体がりーゼ達の真ん中でぶつかり合い、対極図のように混じり合い、お互いを喰らいあって消滅したのです。

「やるわ……っ!」

停滞空間を使い、消滅と同時に接近し、ディザスター殲滅者を振り下ろす………

「ちっ、舐めるんじゃ……!」

神が障壁を展開し、ディザスター殲滅者が障壁に触れた瞬間に障壁は消滅。迫る刃に身体を捻って避けようとする。

凄い反応速度なのです……でも、ディザスター殲滅者からは逃れられないのですっ!!

「喰らい付け殲滅者!!」ディザスター

「ぐっ、嘘でしょっ!完全に避けたわよ!」

神はさすがで、心臓を狙ったのに腕一本しか奪えなかったのです。

「再生……しないですって!!」

「虚無の力は神にも有効なのです!」

「再生不可って、チート過ぎるわよ! つうく、こっちもやってやろうじゃない!」

身体を回転させ、二撃目を放つのです。当然、回避不可なので、避けた神にまた中たるはずなのですが。

「甘いわよ! 《運命改変》」

「避けられたのです!？」

「さっきのお返しよ!」

「がはっ!？」

うつ、痛いです。お腹を蹴られて吹き飛ばされたのですから仕方ありません。

「運命に介入しての改変は有効なようね」

「そうなのです。でも、こちらはまだまだやるのです」

「でしょうね。さすがに神殺しと豪語するだけの事はあるわ。素人のようだけどね」

「否定しないのです」

戦闘訓練なんてやってないのです。

「まあ、手加減はしないわ。ヴァニティワールド」

「と、わっ、ひゃっ」

嫌な感じがする所を、停滞空間で止めて殲滅者で切り伏せ、無効化するのです。

「反則よね……でも、これならどうかしら？」

神の手に数十メートルある巨大な金色の槍が出来ているのですっ！
いつの間にか………作ったのですか！？

「これで終わりよ。ディヴァインコロナ・ザ・ランス」

「くっ、諦めないのですっ！？」

柏木を打って、地面に手を付き権能による錬成を開始するのです。

「黄金の壁ですって？確かに完全物質の黄金なら行けるかもしれないけど、これは貫通力をメインにあげたうえ、概念まで付与した物よ。だから、無駄ね」

「諦めたらそこで終わりなのですよー！！」

実際、何枚もの黄金の壁が貫かれていつているです。まずい………
……停滞空間だけじゃ避けきれないし………何か無いか……

・
・
・何か
・
・
・
・
・
あつたのです！

異界の神との闘い2

ベルSide

「ふふ……これで終わりね。確かに人間にしては強かったけど……あの一撃を耐えられる人間なんていないし、確実に死んだわね」

目の前には今なお、光り輝いていて、地面を埋め尽くしているデyvainコロナ・ザ・ランス。

「って、あれ？これって確か埋め負けフラグじゃなかったかしら？いえ、そんなはず無いわね……うん」

「あるよ？貫けグングニル」

「なっ!？」

私の胸から槍の尖端が生えてきた。まさか、背後からなんて……
・油断したわね。

「どうやって助かったのかしら？」

「《時の支配者》と女神フレイヤの権能《運命操作》……です。《時の支配者》で時間を止めて、《運命操作》で失敗する確率を否定し続けたのです。」

「追撃をかけておくべきだったわね……。でも……。まだまだヤレル……。わ……。なんでアンタがそれを使えるのよっ!？」

「解析しましたです!」

「ふざけんじゃ無いわよ!この化け物めっ!？」

小娘の手には私が先程作り出した、ディヴァインコロナ・ザ・ランズが二本、存在した。

「行くですっ!」

「舐めるなっ!?!ヴァニティワールド・ジ・アンリミテッド……!」

虚無の属性を持つ、世界を作り出して閉じ込め、崩壊させディヴァインコロナ・ザ・ランズを無効化させる。

「ちえりおーです」

「ぐっ、意味違っわよっ!」

背後からの蹴りを避けつつ、カウンターで蹴り飛ばしてやる。

「ぐふっ！？ 痛、痛あつ、痛あ、あああつ！」

「・・・・・・・・素人ねアンタ・・・・・・・・」

ゴロゴロとのたうちまっている小娘をみる。

「仕方無いのです。カンピオーネになっているのに気付いたのは、こないだなのです」

「まあ、手加減はしないわ。この槍に力をどんどん吸われているんだからね」

槍に私の中に存在するプラーナが吸われているのが判る。長引けば私が負ける。

「はいです。なので奥の手、他人任せなのです！我が身に来たれ《
ヴァルキュリア
戦乙女》」

「我が名は槍を司る戦乙女ゲルヒルデ。召喚に応じ、馳せ参じました。これより我が力はマスターの物」

召喚された翼ある存在は、小娘の中に消えた。それを表すように、小娘にも純白の翼が生えて・・・・・・・・直ぐに黒く染まった。

「ちよつ、反則でしょ・・・・・・・・」

融合した瞬間に、小娘は視界から消えて、私の右上から踵落としを放って来た。

「ぐっ、メイオみたいな存在ねっ！！ 嫌になるわ、ねっ！」

腕に付けている攻撃魔装ロイヤルプリズムを発動。日輪の如く光り輝く光球を両腕、両脚に纏わせて小娘の攻撃をクロスした腕でガード。

「《運命操作》です」

「甘い《運命改変》」

お互いが運命を操作改変しながら、近距離で殴り合う。度重なる運命の操作と改変により、捻曲げられる運命は幽世・隠世の空間を変革させていく。

私の攻撃が中たりやしない。戦闘技術も戦乙女を取り込んだ事で、ヴァルキュリア達人を軽く超えてるし……。何より、時間までバラバラになりだしてるわね。

「はっ！」

「わわっ！」

確かに捕らえ、殴ったはずなのに、空を切る私の拳。

「そこっ！」

「甘いです！」

おかしい反応があつた場所を蹴ると、肘と膝で私の腕を挟んで、折ってきた。瞬時に再生はできるけど……。痛いわね。

それから、私達は近距離で激しく殴り合いながら、魔法を撃ち合っていく。

ベルSide Out

闘いを初めて数十日が立ちました。今だに私達の闘いは続いています。

「いい加減死になさいっ！」

「それはこっちのセリフ……ですっ！」

私はデイヴァインコロナ・ザ・ランスを圧縮した物を握り、構えます。周りにも魔王球を多数作り出して準備も出来ています。

「そろそろ決着を付けましょうか」

「はいです」

何か、凄く嫌な予感がするです。

「《あまねく、滅びあれ》」

「っ！行くです！」

数々の魔法を打ち出しますが、その全てが神に中たる前に消滅して行くです。それに、どんどん私の力……生命力も削られて
います。

「これはまずいのですっ！」

「これはね、生命力が低い物なら、問答無用で消滅させる力よ。今の弱った貴女になら効くでしょ？こほっこほっ」

「心臓を貫かれているに、よくやるのです」

時間を止めて、神に向かって接近するです。でも、その間もどんどん生命力が減って行くです。

接近したら運命を操り、殴りかかるです。

「中たるかつ！」

「っうっう！」

神の反撃で、リーゼは右腕を消されたです。右腕を失った痛みを我慢して、出来た隙をつき、心臓に突き刺さったままのグングニルに
変形した殲滅者^{ディザスター}を掴み、力を解放するです。

「試行のルーン」

「くそっ・・・・・・・・覚えてなさい・・・・・・・・」

神は光となって消えて、光は私の体内に入り、新たな神力・・・・・・・・
・多分、新たな権能を手に入れたのです。

それにしても、リーゼは神と闘うと必ず何処かが壊れるのです。さて、少し、お休みなのです。

そして、リーゼは回復の魔法を設置して、クレーターと荒野の中、眠りに付きました。

「やあ、おはよう」

「んっ、ここはどこですか？」

見渡す限り、真っ白な空間なのです。

「ここは狭間よ。私はパンドラ、貴女達カンピオーネの母よ」

「お母さん？」

「そっよー」

「ん〜」

頭を撫でてくれる手が気持ちいのです。

「貴女をここに呼んだ理由は、なんでか知らないけど、別世界の神・
．．．．．古代神が召喚されたのよ」

「古代神？」

「ええ。貴女がさつきまで闘っていた神がそう。彼女は空をあまねく支配する蠅の女王ベールⅡゼファーって言って、こっちの世界じゃ、ベルゼブブの変異種になるのかしら？まあ、これは別にいいわね。問題は、彼女達古代神は神話に一切影響されないで、その全てがまつるわぬ神となり、強力無比な連中になるわ」

倒せばいいのかな？でも、強かったけど。

「ぶっちゃけ、何度でも直ぐに蘇るチート神なのよね。しかも、本体だから、正に歩く災厄よね」

「あ、あの．．．．．」

「つと、いけないいけない。まあ、本題なんだけど、彼女の権能が欲しいわよね？」

権能を得るのは、一人で神に勝利したカンピオーネの当然の権利なのです。

「はいです。やっぱり、欲しいです。駄目なのです？」

「だってさベルちゃん」

「ちつ、仕方ないわね。負けたのは事実なんだし……いいわ。私の力をあげる。郷に入っては郷に従えとあの馬鹿も云っていたしね」

さっきまで闘っていた神がいました。

「じゃあ、ベルちゃん達、異界の神も術式に組み込んでいます」

「ええ、お願い。帰る方法の探索もね」

「お任せくださいな」

それにしても、異世界の神だったのですね。

「さて、私が貴女にあげる力はこの三つよ。今回は私が選ばせてもらったわ。この裏界の大公に勝ったんだから、それなりの力をあげる」

「あ、ありがとうございます？」

「感謝なさい。権能は《魔界変成》《従属の魔眼》《魔王顕現》よ。《魔界変成》は自らの魔力……。こつちじゃ、呪力ね。呪力を周りにばらまき、自分に都合のいい空間に作り変える力よ。これにより力は上がるわよ。」

次に《従属の魔眼》は、相手の肉体と精神を強制的に従属させる権能よ。注意は、神に使う場合、多くて三回、下手したら一回くらいしか効かないわ。それに、自分を傷付けさせるとかは抵抗されて無理ね。

最後に《魔王顕現》は、自身の力……。貴女達カンピオーネ

なら、一時的だけど、篡奪した権能の元となる神の力……呪力などがそのまま手に入るわ。権能は無理だけどね。むしろ、権能の及ぼす力は上がるでしょうね。貴女の場合、最初に言霊で自身を変質させていたから、それと同時に使えばいいわ。それに、こっちなら詠唱なんていらないし便利よ。

これで終わりつと……全く、落し子を作るより大変ね」

確かに、私の中に入っていた力が明確になった気がするです。

「あ、あの……ありがとうございます」

「別にお礼なんていいわよ。これがこの世界のルールと云うなら従うだけよ。それに、面白いルールじゃない。とっても楽しくなりそうよ……ふふふ」

こ、この人（？）、こ、怖い……です。

「さて、貴女はそろそろ戻りなさい。ここは現実世界と違う時間で動いているんだからね」

「はい。お休みなさいです……」

「ええ、お休みなさい。また会いましょう」

こうして、リーゼは再度意識を失い、この狭間での会話を忘れてしまっただのです。

異界の神との闘い2（後書き）

現在、リーゼが倒した神

フレイヤ＋クロノス

オーデイン

ベール＝ゼファール（ベルゼブブ）

得た権能

《時の支配者》：時を自由に操れる

《空間操作》：空間を操れる（覚醒不完全）

《黄金精製》：完全物質純度100%の黄金を創りだせる。形は自由

《叡智の瞳》：魔術や魔法、物、生物などを解析し理解できる。

《運命操作》：運命を自由に操作出来る。ただし、出来る範囲は制限あり。

《従属の魔眼》：対象を支配し従属させる。神と神殺しには1～3
回くらいしか効かない。無論、抵抗可能。未覚醒。

《魔界変成》：空間を自身の都合の良いように変更する。未覚醒。

《魔王顕現》：倒して篡奪した神の元の力を一時的に纏めて力を増幅する。具体的に云うと、リーゼなら神4柱分の力を一度に発せられる。未覚醒。

結構酷い権能が増えて参りました。

ベルから頂いた権能はナイトウィザードの大いなる者から一部頂きました。

ラスボスとご対面？

気が付いたら知らない上空……………宇宙に近い場所なのです。しかも、現在、落下中なのです。

『ごめん、転送場所間違っちゃった　しばらくは大丈夫にしておいたからどうにかしてね、義母より』

多分、パンドラ母様のせいです……………よく覚えて無いけど。

ヴァルキュリア
「戦乙女」

権能を使って、翼を作りだし空に漂うのです。

「ここは空高く寒いのです」

キヨロキヨロと回りを見てみると、デブリが沢山ありますので、そちらで休憩するのです。

何か浮き島みたいな場所があったのです。中を調べてみると、神刀を抱いて眠っている神様を霊視したのです。

『我が宿敵の娘よ、何用だ？』

そしたら、凄く恐い気配がする神様から念話が来たです！

「パンドラ母様のせいで迷い込んだだけなので、特に用は無いのです。ただ、休憩によっただけなので……………」

『そうか……………アヤツのせいなら仕方あるまい。ならば小娘よ、しばし私の暇潰しに付き合え』

「内容によります」

『ただ、小娘とパスを繋げ、我はこれから汝を介して外を見たいだけよ。報酬として、我が力の一部をくれてやる……………悪い話ではなからう』

「私の精神や肉体が安全なら別にいいのです」

『契約は成立だ』

すると、リーゼの中に巨大な神力と誰かの意識が流れ込んで来たのです。

『今から私の武技を授ける。しかと覚えよ』

「わわっ!?!」

それから、身体が勝手に動いて色々な動作を身体に直接覚えさせられたのです。

月日が経って、ようやく身体を返してくれたのです。

『それでは我は出ていく。我と縁が深い場所に汝を送る』

「お願いするです」

結局、武技を教えて貰っただけで、リーゼの身体から出て行ったので安心です。

転送された場所はどこかの島です。そして、湖の辺に剣が突き刺さっていたのです。

「えい」

とりあえず、剣を抜いて持って見ましたが、剣は崩れていったのです。それと同時に、さっきまで会っていた神様と似た気配の神様が現れたのです。

「封印が解けたか……………貴様が我を解放したのか？」

「そうなるです」

出て来た神様は、光り輝く黄金の剣を持ってたです。これも、剣の形こそ違っけど、あの神様に似ています。ただ、姿はフルプレートアーマーなのです。

「ならば神殺しよ、戦おうか」

「とりあえず、回復が先なのでは無いですか？」

「いらぬ世話だっ！ 我は騎士王アーサー・ペンドラゴン、敵の情けなど受けぬ！」

「じゃあ、リーゼが勝ったらその力、貰うのですよ？」

「良からう！ では、参るぞ我が仇敵よ！」

「我は冥府魔道を進む者なり！」

言霊を発つして自身を改変する。

「我が霸道の前に立ち塞がる者をことごとく打ち砕く者なり！」

身体が作り替えたために、身体の奥底から力が沸いて来る。

「人であろうと、神であろうと、魔王であろうが、我が霸道ならば、ありとあらゆる生きとし生きるものに死を与えん！！！！！」

「準備が出来たか。では、参る！」

瞬きをする間に接近して来たアーサーは、黄金の剣……………エクスカリバーを振り下ろして来たです。リーゼの腕は無意識に跳ね上がり、エクスカリバーを殲滅者で受け止めたのです。
ディサスター

「ふはは、やるでは無いか！ それでこそ我が宿敵よ！ 我を封印した奴らにも目に物見せてくれるわっ！」

「ここで貴方は終わりなのです！」

力の差は歴然で、リーゼは自ら吹き飛ばされて距離を取るのです。

「我が時よ、駆け抜けよ」

リーゼの時の流れを速くして、自分だけの空間を作りだすのです。
この時、《魔界変成》と言う権能が使用出来ると思ったので使ってみたのです。

すると、世界その物が変質し、空には深紅の月と巨大な歯車達。更には宙に浮いている数万の魔導書達、地面は10cmくらいまで水に使っている………かなり混沌としている場所になったのです。

「なんだこれは………まあ、よい。来たれ我が軍勢よ！ 我が敵を蹂躪せよ！」

大量の騎士がアーサーの召喚に答えて、水面からはい出て来るように現れた。

「戦乙女さん達、リーゼの元に馳せ参じるのです！」
ヴァルキュリア

こちらにも負けじと大量の戦乙女達を召喚したのです。
ヴァルキュリア

「美しい………我が物にしたいな」

「残念ながら、この子達は貴方を導く死神なのです！」

睨み合う騎馬に乗った方に近い騎士と二百くらいの戦乙女がリーゼ達の号令により、激突を開始したのです。
ヴァルキュリア

ただ、リーゼを目指して突撃して来る騎士達に、戦乙女達は光り輝く槍を作り出して、空中から投擲するのです。その槍が水面の下にある地面に突き刺さると光の爆発が起きて、大量の兵を消し飛ばして消滅させて行く。

「我が兵達よ、畏れず突き進め！」

アーサーは自身もこちらに突撃を駆けて来て、最前列で光り輝く槍をエクスカリバーで切り裂いて行くのです。しかし、英雄が相手だからか、今回の戦乙女達は苛烈に攻め、普段以上の力を発しているのか、アーサー以外の敵はどんどん減っていくです。

「ディヴァインコロナ・ザ・ランス」

ディザスター
殲滅者で地面を突くと同時に神を殺す力を持つ魔法を撃ち込む。

「くっ、切り裂けエクスカリバー！」

アーサーもこれが魔法の粹であり、神を殺す力があるのを理解したのか、エクスカリバーを振り下ろし、光の刃を作り出してディヴァインコロナ・ザ・ランスと激突し、激しいぶつかり合いを展開しているです。

その間に、リーゼはトラップとして様々な仕掛けを施したのです。もちろん、呪力を込め続けている状態で行ったのです。

「ハアアアアアっ！」

だからか、リーゼの魔法を切り裂きこちらに進んで来たのです。その時、リーゼは地面に鎌で叩いてトラップを発動させるです。

「己、トラップかつ！」

「ヴァニティワールド・ジ・アンリミテッド」

アーサーの足元に虚無の空間がいきなり現れて、アーサーやその兵達を飲み込んでいく。

「やってくれる！」

その後も、爆発やヴォルケーノ（炎の猫）、戦乙女達の突撃、運命ヴァルキユリアの改変による援護を入れて激しい戦いが続いていくのです。

どれくらいか解らない時間が過ぎて、ボロボロになりながらも全戦乙女を葬り、私の前へと現れたのです。それも、今度は下がないのです。

「さあ、楽しく切り合おうぞっ！」

「お断りなのですっ！」

サイドステップで避けた瞬間、さっきまでリーゼが居た場所にエクスカリバーが振り下ろされ、水面毎地面が切り裂かれ、深い亀裂が出来たのです。

「我が剣、カリバーンは約束された勝利の剣だ。故に、正々堂々となら我に負けは無い！」

連続で放たれる剣技を予測し、時間を速くした身体で左右上下に素

早く移動してなんとか凌いでいくのです。あの神様から武技を教わらなかったら殺されていたのです。

「なら、その剣を排除すれば良いのです!」

元の神話のせいか、あの神様に教えて貰った武技に全く同じなので、三日月の部分にエクスカリバーを合わせて、弾き飛ばすのです。

「させるか!」

「絶対成功させるです!」

運命改变の力を使い、失敗する未来を潰していくです。それが例え呪力を大量に消費しようとも構わないのです。

「私の勝ちです!」

「まだだ、我は死んでおらん!?」

「いいえ、これでチェックメイトなのです!」

ディザスター
殲滅者でアーサーを殴り付け、落ちてきた神剣エクスカリバーを持つて、それをアーサーに振り下ろすです!

「馬鹿な、何故使える!?」

「エクスーカリバー!」

残りの呪力を有りったけエクスカリバーに込めると、光り輝く黄金の剣は黒く渦々しく染まり、本来の救世の神刀正反対の性質へと変

質したようなのです。更に、形も剣から刀へと変化したです。

「有り得ぬ……………」

漆黒の神刀エクスカリバーはアーサーを切り裂いて砕き、その力を吸収しついったです。

「リーゼの勝利です！」

「覚えておれ……………」

負け犬の遠吠えを残して、アーサーは消えて行き、約束通り神力が流れ込んで来たのです。

『本来なら新しい権能は入らないけど、本人との約束とこの前のお詫びも兼ねて権能をあげるね。優しい義母より』

「弱ってたから本来は駄目なのです？　まあ、神刀を手に入れたのでどっちにしろプラスなのです」

アーサーの骸があつた辺りから残っていた鞘を掘り出して、エクスカリバーに合わせると、鞘も変化して、丁度良い感じになったのです。

「ディザスター殲滅者とエクスカリバーは分けて使……………う……………で……………」

また声が無くなったのです。先程の戦いのせいか、眼も本調子では無いので包帯を巻いておくのです。どうせなら、修行がてらに両目に巻いておくのです。エクスカリバーは杖みたいにして持っていく

です。

とりあえず、お休みなのです。呪力を回復させないと、どうしようも無いのですよ。

Side アリス・ルイズ・オブ・ナヴァール

おかしい、私とアレクで掛けたアーサー王の封印に異変があります。

「ミス・エリクソン」

「ここに……………」

「直ちにアーサー王の封印を調べて下さい」

「了解しました」

これでは報告次第ですね。アレクはどう動くのでしょうか？

S i d e O u t

S i d e アレクサンドル

俺は先程サー・アイスマンから上がった報告を読んでいる。

「では、アーサー王は変わり無くその場にいるのだな？」

「はい。外側の封印からですが、間違い無くアーサー王の神力を確認しました」

「中は判らないか……………」

「はい。あの封印は、異空間を作り出しているような物ですから、外側からでは判りません。それに、アーサー王の封印が解ければ封印は壊されているはずです」

「そうか。引き続き警戒を頼む」

「了解しました」

あの化け物を倒す算段を考えねば……いや、それよりあの神祖の方が先だな。

S i d e O u t

ラスボスとご対面？（後書き）

やっちゃったけど気にしません。

大食い魔王が顕れた！

森の中、目覚めたリーゼはこれから抜け出せません。

右に行っても、左に行っても元の泉に戻ってしまうのです。

リーゼは一生このままなのです？

『娘よ、汝の権能と我が神刀と対になる汝の神刀を使って空間を切り裂けば良いのでは無いか？』

成る程、確かに出来そうなのです。ありがとうございます。

『いや、礼は良い。我も一週間以上同じこの景色は見飽きた。せつかくの楽しみなのだから、早く行くのだ』

ではでは、行くです！

漆黒の神刀を構えたリーゼは、適当にエクスカリバーで空間を切り裂いて、出来た空間の中に飛び込んだのです。

リーゼは空間操作の権能を漆黒の神刀エクスカリバーを触媒にする事で多少なりとも使えるようになったのです。だから、空間狭間から別空間を繋げて何も考えずに出たのです。

「がばがば（うゝゝみゝゝ！ たしゅけ）ごぼごぼ……………」

『汝は存外抜けておるな。時を止めている汝は死なんのだから、我は助けんぞ。その方が面白いしの』

死ななくても苦しいのです！ この神様、余り役に絶たないのです！

『いや、汝が忘れてるかもしれないが、汝は神殺しの魔王ぞ？ 何故、神殺しの魔王を殺す我が汝を助けると思うのだ？』

武技を覚えてくれたり、浮き島から助けてくれたから？

『それは報酬だろう。まあ、我は汝を通して暇潰しが出来たら良いので、助言は気が向いたらしてやる。しかし、この程度なんとも無かるう』

致し方無いのです……………なら、全力でこの深海から抜け出すだけなのです。

「（シーラカンスを初め、皆さんに申し訳無いのですが……………全身全霊でぶった斬るのですっ！ 全力全壊っ、エクス、カリバーーっ！）」

漆黒の光がエクスカリバーの軌跡を追うように出て行き、まるで旧約聖書で海が分断された様に別れていったのです。途中にあった島も分断して地平線の彼方までもです。

「（ちょうどやり過ぎたのです……………とりあえず、脱出……………です）」

翼を広げて、飛び立ち近くにあった陸地に上陸したのです。

ここは何処でしょうか？ 美味しそうな匂いがそこら中からするのです。

それに人が多くて大変なのですが、どこか慌ただしいのです。

「お嬢ちゃん、美味しい肉まん買わないか？」

「お金、無い。換金場所か質屋はある？」

「あゝおじさん英語解らないね」

カンピオーネの標準装備の千の言霊じゃ、書けないから仕方ないです。だから、翻訳魔法を使ってからもう一度見せると、問題無く理解してくれたです。

「質屋なら、あそこの角を曲がるね」

「ありがとう」

言われた通りに道を進むと、質屋に入って行きます。

「ようこそ、質屋陸家へ。今日はどんなご要望ですか？」

「“これを買って欲しい”」

ポケットに手を入れて、黄金の棒やアクセサリを数点作り出して手渡します。

「これは魔術品ですな……………素晴らしい……………」

「純度100%の黄金で出来ています。貴方はこれにいくらの価値を付けるです？」

「そうですね……………一億円でどうですか？」

安いかどうか解らないから、元もタダなので別にいいです。

「構いません。口座は無いので現金でお願いします」

「げ、現金ですか……………小切手をお願いします。その銀行で受け取れますから」

「わかった」

それから、銀行で小切手を交換してお金を異空間に繋げたポケットに仕舞って、買い食いに掛けたのです。

先程の質屋。

「これは報告せねば……………いらっしゃ……………五嶽聖教の方ですね。丁度よかった」

「どうした？」

入って来たのは14歳くらいの少年だった。

「先程、強大な呪力を感じたがそれに関係があるのか？」

「はい、先程小さな白人の童がこれを持って来まして……………」

「これ程の呪力の籠った品は素晴らしい。これは五嶽聖教の方で買い取ろう。売り手に関しての情報を頼む」

「あちらの銀行に向かったはずです」

店主は商品を渡し、見返りに三倍の額を受け取り、リーゼの情報を流した。

銀行から出たら変な気配がしたので、空間移動をしたのです。すると、中国と言う国の江西省にやって来たみたいです。

「ここにするです」

何かとっても豪華そうな場所ですが、気にしないのです。

キラキラ、ピカピカで坪とか掛け軸とか凄く高そうなのです。

「いらっしやいませ……………失礼ですが、お金はございますか？」

「あるよ」

ポケットから1000元の札束を二つ出すと、店員の態度が変わったのです。

「失礼しました。こちらがメニューになりますので、お先にご注文頂いて、あちらで服をお買い求めください。その濡れた格好では風邪を引いてしまいます」

確かにリーゼの格好はボロボロの濡れ濡れで、浮浪児の様な格好なのです。

「わかったのです」

適当にオススメを注文してから、服屋さんに行き、店員さんにお金を見せてお任せすると、奥に連れていかれ、揉みくちにされながら徹底的に洗われて、着せ替え人形にされて、ようやく深紅のチャイナドレス（龍の絵柄入り）を三着、900万円で購入したのです。（絵柄的にはシャナ修行時代に着ていた奴）

「お腹空いたのです」

気分的なのですが。

「こちらへどうぞ」

さっきのお店で案内された先には、くるくると回るテーブルの上に
乗せられた大量の料理が乗せられているのです。

早速、席に着いて神様にお祈り（習慣）をして、ご飯を食べます。

「もきゅもきゅ、はむはむ」

肉まん、フカヒレスープ、フカヒレラーメン、麻婆豆腐、ビビンバ、
水餃子などを次々と食べて行くのです。

『神殺しが神様に感謝するのは可笑しいが………そんな事より、
我も食べてみたくなった。味覚を繋げるが良いか？』

「もきゅもきゅ（良いですよ）」

『では………以外に行けるな………』

「（どれだけ食べるんだ？ というか、あの小さな身体の何処に入
っている！？ しかも、冗談で進めた満漢全席………化け物め………
………）」

次々と出て来る料理を食べて、リーゼも神様も満足した時には食べ
始めて三時間が経過していたの。

「あ、ありがとうございます。お支払いは三十万元です」

「“予想外に高いです………一、二、三、四………”」

睨まれたので、慌てて百元札の束を取り出して、数えて行くのです。

「（何処から出したんだ！？）」

「どうぞです」

「確かに……………頂きました。またのお越しをお待ちしております」
引き變った笑顔で見送られたリーゼは、宿屋に向かったのです。

宿屋も高そうな所に来たのです。

「いらつしやい」

「子供一人、大人二人、ふかふかのベットを所望するのです」

札束を店員の目の前に置くと、丁寧に対応してくれました。

「スイートルームでよろしいですか？」

「はいです」

「では、こちらにどうぞ」

案内された部屋は廬山が一望出来る、とても景色のいい部屋だったのです。

「戦乙女^{ヴァルキュリア}二体は護衛なのです。後はトラップでも仕掛けて置くの

です”」

部屋をちょっとした要塞にしたら、リーゼは柔らかい御布団へダイブしようとしたのです。

『修練だ』

「面倒なのです……………」

『一日サボれば三日だぞ？』

「……………」

仕方ないので、神様とイメージで戦うのです。

三時間後、刀だけで戦った為か、ボロボロに負けたリーゼはシャワーで汗を流して、広いお風呂で泳いだ後、ベットに飛び込んで、死体のように眠ったのです。

明日は日本を目指すのです。

修行の日から日本へ

起きたら大変な事になっていたですよ。リーゼの部屋に招いたはずの無い男の人達が沢山倒れている気配がするのです。

「わんわんお〜〜〜」

「????」

とりあえず、生き残りの人に挨拶して見たら、返事が聞こえないのです。それにしても、いつの間にか女の子の部屋に夜遅くか朝早くか判らないけど押し込んできた……………つまりあれなのです。

「このロリコンの方々は、リーゼに夜這いをしに来たのですね」

「違っつ!」

「そうですか、貴方にそんな趣味があったとは師である私は知りませんでした。これは矯正が必要な様ですね」

む、綺麗な女性の声がしたのです。

「だいたい、師父が行けと言ったんじゃないですか。僕は推定とは言え、魔王たるカンピオーネに近づきたくなかったのに……………」

「黙りなさい。この羅、翠蓮に意見する気ですか？」

「滅相ありません」

「よろしい」

それにしても、片手間に襲って来る戦乙女を殺したのです。それも、ヴァルキュリアカウンターの一撃みたいなのです。

「さて、貴女が八人目のカンピオーネですね」

「こくこく」

「我が領地で暴れた事に付いて聴きに来ました」

「暴れた覚えは無いのです」

「島毎海を断ち切ったのは貴女でしょう」

「あれは深海から脱出するためにやっただけなのです」

正直に告白しながら、戦闘準備をします。具体的には隣に寝かしていた漆黒（破滅）の神刀エクスカリバーを手に取ります。

「さすがカンピオーネ、脱出の為に海を悪とは流石です」

「本来なら私と戦えと言う所ですが、今回はこの品に免じて赦してあげましょう。まつろわぬ神との戦いが控えていますから、運が良かったですね」

「まつろわぬ神はどうでもいいけど、アクセサリーが欲しいなら

作ります。被害の補填にでも宛ててください”」

インゴットを数個とイヤリングのセットを渡してあげたです。

「いい心掛けです。何かあれば聴いてあげましょう」

「日本の生き方が知りたいです。日本に形見の手紙を届けないといけないので……………」

「分かりました。弟子よ、この娘を日本へ行く手配をしてあげなさい」

「了解です」

ロリコンさんが携帯で何か連絡を入れているです。

「次に会う時には、今度試合しましょう。ただし、私の獲物を取らないように」

「獲物は何？」

「孫悟空です」

「出来る限り気をつけるですが、売られた喧嘩は買うですよ」

「それは構いません。そうなれば、私は貴女と試合までです」

「うん、覚えておくです」

そんな会話をしていると、ロリコンさんがこっちにやって来たです。

だから、お姉さんの後ろに隠れたのです。

「可愛そうに……………やはり、後でお仕置きですね」

「いや、違います。マジで勘弁してください！　そもそも魔王たる御身にそのような事をする前に塵と消されます。この女だヴァルキュリアってなんとか勝てたくらいなんですから！」

「確かにそうですが、どちらにしる修行ですね。そうだ、送るついでに下見をかねて貴方も日本に行きなさい。その間、彼女に鍛えて貰いなさい。実戦訓練が出来て丁度いいでしょう」

「“いいですね？　確かにリーゼは地理とかよく解らないので、助かるです”」

「ええ、貴女の侍女達が丁度いい感じみたいですから。ああ、襲つて来たら殺して構いませんから」

「“了解”」

「やっぱり勝手に決まって行く……………」

旅のお供が出来たのです。手紙自体は急いで無いので取り敢えず、観光からなのです。

という訳で、羅・翠蓮さんと陸・鷹化さんの三人で険しい道を進み、廬山の山奥にやって来たのです。

「此処から更に険しくなりますが修行場所には良いです」

「取り敢えずは階段ですけどね」

目の前には数千か数万は有りそうな階段があります。それも、木々のトンネルが出来るほどの中なのです。

「頑張るです」

一段一段、しっかりと確認して登って行くのですが、やっぱり見えないところになったりしたのですが、ロリコンさんが支えてくれたりしてくれたです。流石、ロリコンさんなのです。

それから崖を飛び越えたり登ったりしたり、険しい道を進んで庵に着いたのです。

「ふむ、貴女も武術を嗜んでいるみたいですから、権能無しの純粋に武術のみで戦いましょうか」

庵に着いて直ぐに勝負を挑まれたのですが、確かに武術のみなら、そこまで被害は出ないのです。

「でも、リーゼは刀ですよ？」

「どうせ中たりませんから問題ありません」

「むっ、やってやるです」

「じゃあ、僕はご飯を用意してますね」

「分かりました。では、行きましょう」

「はいです」

庵に入らずに外で対峙するリーゼと羅翠蓮さん……………お互いに構えを取ると睨み合っです。

「目隠しは取つたらどうですか？ まだ慣れていないでしょう？」

「はいです」

目隠しを取って、片目で見ると、やっぱり綺麗な女性なのです。

「それでは、行きましょう」

「はいです」

スケッチブックを異空間に仕舞って、居合の構えを取り直すのです。

「ふっ」

羅翠蓮が一瞬で目の前から消えた瞬間、首筋の後ろがチリチリしたので、背後に振り向きながら抜刀したです。

刃は迫っていた羅翠蓮に拳で刀の腹を叩かれる事で迎撃されたのです。

「なるほど、多少はやりますね」

どうやら、助かったみたいなのです。

「“こちらから行くのです”」

このままじゃ負けるのです。

「来なさい」

手でこいこいまでされるとは、屈辱なのです。なので、こちらも本気なのです！

「ほう……………」

刀を戻して、縮地で何度も切り替えし残像を残しながら接近するのです。

「どれが本物が解らないなら、全て破壊すればいいのです！」

羅翠蓮は素手で地面を殴り、地面を粉碎して土や岩などを弾丸として無作為にぶつけて来たのです。

流石、カンピオーネ……………無茶苦茶なのです。土や岩を足場にして更に不規則で接近するのです。

「ふむ……………」

近付いた瞬間、抜刀して高速で切り付けると、羅翠蓮は同じく拳で応酬して来るのです。

「さて、終わりですね」

「がっ」

切り合っていたら、刀の隙間を付いて、蹴りがリーゼの鳩尾に入ってリーゼは真っ暗になったのです。

次に気付いた時は、羅翠蓮さんに膝枕されていました。

「目覚めましたか」

「はいです」

「貴女は確かに才能もありますが、あの剣術は無理矢理覚えただけの付け焼き刃ですね」

確かに、神様の剣術を無理矢理身体に覚えさせただけなのです。

「それに、完成された剣術の技術に体術の技術が体追い付いていません。はっきり言って、宝の持ち腐れですね」

「あう」

「なので、孫悟空復活の準備が整うまで鍛えてあげましょう。感謝なさい」

「はいです」

なんか、逆らったら大変な目にあいそうなので、取り敢えず修行を

付けて貰う事にしました。

それから二年、十二歳になったリーゼはまだ廬山に居るです。

「師父はハズレを引いて怒っている様で、手が付けられません。どうにかお願いします」

なるほど、だからこんなに激しいのです

今は、義姉様と色々壊しながら組み手中なのです。

「全く、たった二年で此处まで来るとは驚きです」

飛び蹴りをしたら、避けられてそのまま後ろの岩を粉碎して、その場で旋回、襲って来た姉様の脚を旋回しながら迎撃したです。

「これならどうですか？」

それから、高速で蹴ったり殴ったりの近接戦闘なのです。当然、周りの被害は凄いです。

「今日こそ勝つです！」

「やれるものならやってみなさい！」

「さて、今日も後が大変そうだな……………」

それから、三時間程殴り合いを行ったのです。

「勝利なのです」

「まさかたった二年で、勝利をもぎ取られるとは思いませんでした」

「二十回もやれば一回は勝てるのです」

それでも、片腕と片足を犠牲にしての勝利なのです。

「山を壊すとは思いませんでしたが、確かに有効な手段です」

「お二人共、お食事の用意が来ています」

「分かりました」

「ご飯を食べ終わると、お姉様が何か持って来たです。義姉妹にされた時と同じ感じですか？」

「これで、貴女も免許皆伝です。もう日本に行っても大丈夫でしょう」

「やっとなのです」

「それじゃ、僕が送って来ますね」

「ええ。日本に孫悟空の情報があればよろしくお願いします」

「了解です」

それから、姉様と別れてロリコンさんに、偽造パスポートを渡されて飛行機のファーストクラスに乗せて貰ったです。

日本に着いたら、草薙さんの所に行つて、リーゼの旅は終了なのです。でも、日本にもカンピオーネがいるらしいので、会いに行くです。

「飲み物はいりませんか？」

「アップルジュースで」

「どうぞ」

美味しいジュースを飲んでいると、変なオジサンがやって来ました。

「失礼ですが、日本にはどういった御用件で？」

「手紙を届けると、コレクションを手に入れる為……………後、観光なのです」

「そうですか……………」

いったい何だったんです？ まあ、リーゼは日本に着いたら草薙さんを探しに行くのです。
はやゝゝゝ明日にゝゝなるでゝゝすゝゝあれ、姉様からの手紙だ

……日本のカンピオーネの実力を試して来なさい……了解
なのです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3100s/>

カンピオーネ～幼女魔王の冒険～

2012年1月10日20時26分発行